こどもたちが選んだ春日部うちどく本リスト

＜中学生＞

春日部市教育委員会

《令和７年３月　第２版》

＜　はじめに　＞

　家庭での読書習慣の充実をめざして、春日部市では家読（うちどく）※プロジェクトを進めています。

　この「こどもたちが選んだ春日部うちどく本リスト　うちどく２」は、春日部市内の小・中・義務教育学校の児童・生徒にアンケートを実施して選んだ、「家族や友達に読んでほしい本」の推薦リストです。同年代のこどもたちがどんな本を読んでいて、どんな感想を持ったのか、紹介しています。

　家読に、決まったルールはありません。同じ本を読んでみたり、一緒に本を読む時間を決めてみたり、読んだ本の感想を伝えあったり。それぞれの家庭にあった方法で、家庭での読書を楽しみましょう。

　このブックリストが、そんな家庭での楽しい読書の時間の一助になることを願っています。

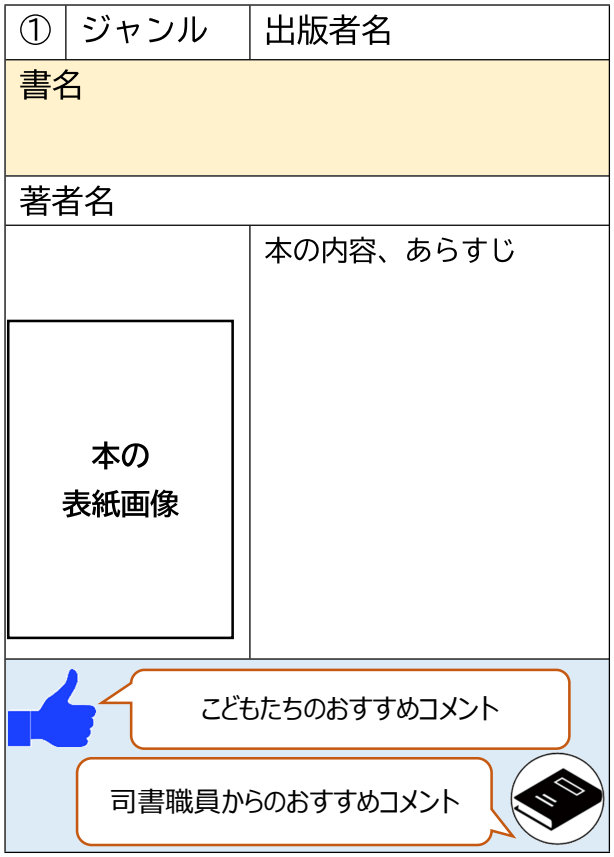
※家読（うちどく）…「家庭読書」の略語で、「家族ふれあい読書」を意味し、家族みんなで読書をすることで家族のコミュニケーションを深めることを目的にした読書運動

（凡例）

●掲載順は以下のとおりです

　・物語→作者名順　その他は図書館での分類順

●各事項について



中学生

①	物語	文藝春秋

香君

上橋菜穂子／作

奇跡の稲・オアレ稲が人々の生活を支える帝国の片隅で、ひとりの少女アイシャが捕らえられた。人並はずれた嗅覚を持つアイシャは、視察官マシュウにひそかに助けられ、帝都へとやってくる。アイシャはそこで、活神とあがめられる香君と出会い、やがて、オアレ稲にまつわる危機を知る。

世界観の作り込みが
とにかくすごい！

②	物語	講談社

笹森くんのスカート

神戸遥真／作

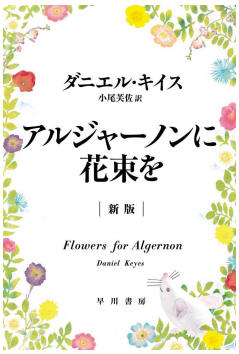
二学期最初の日。クラスの中心になりがちなグループの、さらに中心にいる人気者の笹森くんが、スカートをはいてきた。ジェンダーフリー制服は導入されているけれど、いったいなんのために？　どうして急に？　制服にスカートを選んだ笹森くんと、彼のまわりの４人の物語。

「どうして？」と思いながら
読み進めた。おもしろい

③	物語	早川書房

アルジャーノンに花束を

ダニエル・キイス／作　小尾芙佐／訳



幼児並みの知能しかない３２歳のチャーリィは、かしこくなる実験に参加したいと、手術をうける。同じように脳手術をうけたネズミのアルジャーノンとともに、チャーリィの頭はどんどん良くなっていった。そんなチャーリィに対して、周囲の人々の反応も変化していく。

主人公が天才に変貌した後の
周りの環境の変化に注目してほしい

④	物語	講談社

最高のともだち

草野たき／作

優等生のリクは、秘密にしていた恋心を同級生のライトに言い当てられ戸惑うが、気持ちを理解してくれる友だちができたことに感激する。同じ頃、孤独だった菜摘の前にライトが現れ、菜摘の心が泣いていると言ってきた。このことをきっかけに、２人はライトと仲良くなりたいと願うようになる。

三人のいろいろな視点で話が進んでいくところがおもしろい

⑤	物語	ほるぷ出版

貸出禁止の本をすくえ！

アラン・グラッツ/作　ないとうふみこ/訳

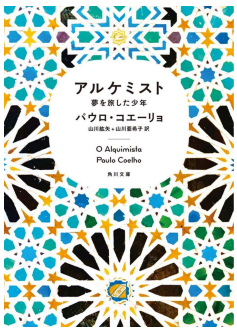
ある日、エイミー・アンが学校の図書室で何度も借りていたお気に入りの本がなくなってしまった。その理由は、保護者から「こどもが読むにはふさわしくない内容だ」と意見が出たためだという。エイミー・アンは、貸出禁止になった他の本も、読んでみることにした。

自分の好きな本がこんなことになったら、と想像してみてください

⑥	物語	KADOKAWA

アルケミスト

パウロ・コエーリョ/作
山川紘矢、山川亜希子/訳



羊飼いの少年サンチャゴは、同じ夢を２回見た。それは、エジプトのピラミッドに行けば、隠された宝物を発見できる、というものだった。サンチャゴは、この夢のお告げを信じ、慣れ親しんだ羊飼いの仕事をやめて、ピラミッドに向かう旅に出た。

人生における教訓を教えてもらえたと思う

⑦	物語	KADOKAWA

透明なルール

佐藤いつ子／作

中学２年の優希は、クラス替えで仲良しの友だちと離れてしまう。不安だった優希に声をかけたのは、クラスでも目立つ瞳子のグループだった。優希は、グループから外されないために、瞳子が何を言うか気になってしまい、自分のことも素直に話せなくなっていた。そんなある日、不登校の愛がとつぜん授業にやってきた。

生きづらい生活が分かる。そこから離れるというのがいい

⑧	物語	ポプラ社

僕は上手にしゃべれない

椎野直弥／作

悠太は中学校の入学式の日、保健室に逃げ込んだ。吃音のために、自己紹介をするのが怖かったのだ。逃げてしまった自分に落ち込む帰り道、放送部の勧誘チラシを手にする。そこには、「上手にはっきりと声を出せるようになる」と書いてあった。次の日、悠太が放送部に行ってみると、ひとりの先輩が待っていた。

吃音者の苦しさや、周りの人の理解、優しさなどが詰め込まれている

⑨	物語	KADOKAWA

雲の涯

宗田理／作

昭和２０年、中学２年に進級した克人たちは、学徒動員として軍事工場へ配属されることになった。中学生でも、日々の生活は戦争と隣り合わせだったのだ。そしてついに、克人たちの住む豊橋にも、焼夷弾が落とされる。戦時中の記録に基づく中学生の物語。

戦争の時の暮らしがよくわかった

「ぼくら」シリーズの著者による戦時中の物語です

⑩	物語	評論社

ぼくのつくった魔法のくすり

ロアルド・ダール／作　宮下嶺夫／訳

土曜日の朝、ママはジョージに、グランマに薬を出すように言って出かけて行った。グランマは自分勝手でふきげんなばあさんなので、ジョージは大嫌い。いじわるなグランマに仕返しをしようと、ジョージは自分で魔法の薬を作ることにした。

主人公がありえないものをいろいろ混ぜて薬にするのがおもしろい

⑪	物語	新潮社

ツナグ

辻村深月／作

一人一度だけ、生者と死者の再会を叶えてくれるという「使者」。ある日、ツナグのもとに、急死した芸能人に会いたいという依頼がくる。はたして、一ファンであるその依頼人は、死んだ芸能人と会えるのか。ツナグの仲介のもと再会する生者と死者、それぞれの物語。

登場人物それぞれの理由があって、どんどん読んでしまう

⑫	物語	岩波書店

星の王子さま

サン＝テグジュペリ／作　内藤濯／訳

サハラ砂漠に不時着したパイロットの前に、不思議な金髪の少年が現れて「ね……ヒツジの絵をかいて…」とねだる。それは、「どこかほかの星」から来た王子さま。その王子さまは、ふるさとのちっぽけな星のことや、それから、いろいろな話をしてくれた。

いい言葉がある

物語のふしぎな世界観がおもしろい

⑬	物語	くもん出版

杉森くんを殺すには

長谷川まりる／作

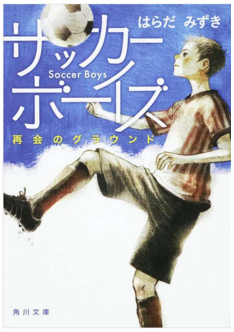
ヒロは、幼なじみの杉森くんを殺すことにした。裁判所で理由を話さないといけないので、殺す理由を日記にまとめておく。そして後悔しないようにやり残したことをやる。そう決めて毎日を過ごしていくヒロは、ずっと杉森くんとのことを考え続けていた。

タイトルに驚きますが、読み進めるとそういうことか！とわかります

⑭	物語	KADOKAWA

サッカーボーイズ

はらだみずき／作



４年生からサッカーチームでキャプテンを任されていた遼介は、６年生になったときライバルにキャプテンの座を奪われた。さらに、ほかのチームからきた巧にポジションを取られてしまい、サッカーが楽しめなくなってしまった。そんなとき、新しいコーチが遼介に声をかけてきた。

サッカーをとおして心と体が成長していくところが感動する

⑮	物語	講談社

あした、弁当を作る。

ひこ・田中／作

中学１年生の竜樹は、ある朝、いつものように母親に見送られたとき、背中にそえられた手に嫌な気持ちがしてしまう。そして、母親手作りのお弁当にも、なぜかプレッシャーを感じてしまう自分にとまどう。そんなとき、クラスメイトが自分でお弁当を作っていると聞き、自分で作ってみよう、と思い立つ。

もやもやしながらも、自分の気持ちを尊重するタツに共感しますか？

⑯	物語	すずき出版

変化球男子

M．G．ヘネシー／作　杉田七重／訳

中学生の男の子シェーンは野球チームの投手。親友のジョシュがいて、気になる女の子マデリンとおしゃべりできたりして、楽しい毎日だ。でも、シェーンには、ジョシュにも言えない秘密があった。

シェーンが、自分の秘密を親友にも伝えられないときの気持ちが切ないです

⑰	物語	新潮社

成瀬は天下を取りにいく

宮島未奈／作

島崎みゆきの幼なじみの成瀬あかりは、周りの目を気にせず、マイペースに生きている。その成瀬が、中学２年のある日、「この夏を西武に捧げようと思う」と宣言した。１ヶ月後の西武大津店閉店まで、毎日夕方のテレビ中継に映る、と言うのである。「ありがとう西武大津店」他５篇

「歴史に名を刻もう」としてるのがおもしろい

⑱	物語	講談社

カラフル

森絵都／作

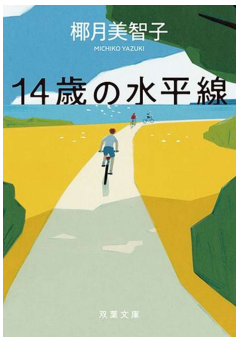
死んだはずのぼくの魂がどこかへ流されていく途中、見ず知らずの天使に「抽選に当たりました！」と行く手を遮られた。ぼくは生前に大きなあやまちを犯した罪で、二度と生まれ変わりができなかったらしい。天使は、ぼくが誰かの体を借りて、もう一度下界で過ごすチャンスを得たのだと言ってきた。

読んだあとが爽快！

⑲	物語	双葉社

14歳の水平線

椰月美智子／作



加奈太は、夏休みに父の征人の故郷である天徳島で、中二男子限定の山村キャンプに参加する。キャンプで出会ったのは、メガネの少年ミラクルと人の好い光圀という、これまでにないタイプの友人だった。そして、加奈太がキャンプに行っている間、征人は、この島に住んでいた14歳だったころの出来事を思い返していた。

１４歳の少年たちの友情物語で、次のページが気になった

⑳	物語	あすなろ書房

いい人ランキング

吉野万理子／作

クラスで一番性格のいい人を決める「いい人ランキング」。一番に選ばれた桃は、クラスの子にノートを貸したり、アイスを買ってくるよう頼まれたりするようになった。桃は、「いい人」に選んでもらったのだから、と思おうとしていた。しかし、あるできごとをきっかけに、自分がいじめられていると自覚する。

少女が追い詰められていく過程と、意外なところから状況を変える姿がいきいきとしていた

㉑	生き方	ポプラ社

さみしい夜にはペンを持て

古賀史健／著

うみのなか中学校に通っているタコのタコジローは、クラスでいじめられて初めて学校をサボった。そのままバスに乗り続け、終点の公園で会ったヤドカリのおじさんは、タコジローが生きていく上で大事なことを教えてくれた。それは書いて自分と対話することだった。

「無理しなくていいんだ」と思えた

㉒	民主主義	理論社

「くうき」が僕らを呑みこむ前に

山田健太／著

人は生まれてからずっと、たくさんの「仲間」と過ごす。そこで、「決まり」を作って守るようにしてきた。決まりを作るのに、よく使われるのは「多数決」だ。でも、みんなが「サイレント・マジョリティ」（静かな多数派）でいると、へんな決まりや「いやな空気」ができてしまうことがあるのだ。

何も言わないことが、どのような結果になるのか、教えてくれる本です

㉓	食文化	岩波書店

巨大おけを絶やすな！

竹内早希子／著

瀬戸内海の小豆島にあるヤマロク醤油は、日本でも数少ない木桶仕込みの醤油の蔵元だ。醤油を作る大桶が壊れてしまったとき、この大桶を作れる最後のおけ職人が、廃業しようとしていた。ヤマロク醤油の康夫さんは、木桶を作る技術を絶やさないために、自ら大桶づくりに挑戦する。

１００年に１回のことを、ずっと絶やさないって大変だな、と感じます

㉔	障害	幻冬舎

僕が生きてる、ふたつの世界

五十嵐大／著

五十嵐さんの両親は、二人とも耳が聞こえないいわゆる「ろう者」だった。このような両親に育てられた子どもは「コーダ」と呼ばれる。「コーダ」であり、現在は聴覚障がいへの理解を深める活動をしている五十嵐さんと、聴こえないお母さんとの人生の実話。

自分じゃなく、家族の耳が聞こえない人の物語というところが気に入った